

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

私の研究テーマは「食口（シック）」  
(食の文化最前線：研究のあゆみと展望：  
食文化との出会い)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5822">http://hdl.handle.net/10502/5822</a>

# 私の研究テーマは「食口(シック)」

朝倉 敏夫 Toshio ASAKURA



Profile

国立民族学博物館教授

専門分野 ● 社会人類学

著書・論文 ● 『食は韓国にあり』(共著) 弘文堂 1986年、『日本の焼肉 韓国の刺身』農文協 1994年、『くらべてみよう!日本と世界の食べ物と文化』(共著) 講談社 2004年、他

所属学会 ● 日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、韓国文化人類学会

私の専門分野は韓国社会の民族学(社会人類学)的研究です。民族学は、世界の諸民族の衣食住をはじめ、経済活動、社会制度、宗教や信仰を調べ、それぞれの民族の生活慣習やものの考え方などを知らうとする学問です。そのために、現地に向き、その人々と一緒に暮らしながら実地調査(フィールドワーク)をしなければなりません。フィールドに入って、最初に民族学者のすべきことは、フィールドの人たちに心配をかけずに、一緒に暮らしていけることを知ってもらうことでしょう。その第一歩が、一緒に「食べる」とです。

私の対象とした韓国社会は、ことに「食べる」ことに強い関心をもっているようです。どんなにおもしろいことでもまず腹ごしらえをしてからという意味の「金剛山も食後の景色だ」という諺ことわざもあります。また、韓国人のあいさつに「メシを食ったか」というのがあります。これは「元氣？」という代わりです。暮らし向きを語る時は「ちゃんと食っているか」という言い方をします。

こうしたことから、韓国社会を見るための一つの切り口として「食」を選んだわけです。現在は、韓国社会だけでなく、海外の 코리아にも研究領域を広げていますが、そこでも

彼らの食生活とともに、彼らの従事する外食産業に焦点をあてて調査をしています。

もともと私が韓国調査に行つたきっかけは、隠居制家族の研究でした。日本の隠居制チェジュド家族を研究していた私は、韓国の済州島でも親夫婦と子夫婦が同じ屋敷地に住みながら別々の生計を営む家族形態があることを知り、一九七九年に済州島と半島部の間にある多島海にある都草島トチョドにわたって、フィールドワークをさせてもらうことにしました。

それから四半世紀が経ちました。都草島の家は、おじいさん、おばあさんと、次男夫婦、その三人の息子たちの七人家族だったのに、今は次男夫婦二人が住むだけです。おじいさん、おばあさんは、すでにこの世にはおりません。息子たち三人はソウルで暮らしています。私は今も、彼らの家族史(ファミリー・ヒストリー)を追いかけています。

私の研究は、韓国の家族研究からはじまりましたが、韓国語では家族のことを「食口」といいます。「食」への関心は、あながち私が食いしんぼであったことだけではないのかも知れません。